我が子、葦舟に乗せて

河口栄二

新潮社版

我が子、葦舟に乗せて

河口栄二

新潮社版

我が子、葦舟に乗せて

定価1000円

印　刷　昭和57年10月10日
発　行　昭和57年10月15日
著　者　河口栄二
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部（03）266-5111
　　編集部（03）266-5411
振替 東京 4-808
印刷所　株式会社金羊社
製本所　加藤製本株式会社
© Eiji Kawaguchi, Printed in Japan 1982
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

我が子、薫舟に乗せて・目次

第一章　最良模範囚の出所　5
第二章　母と子の八年間　21
一、授業参観日　二、休息のない母親の日々
三、一人でお寝みなさい　四、学校側とPTA
第三章　三人の弁護士　83
第四章　夫の証言　101
第五章　子殺しを考える会　110
第六章　学者の言い分　132
第七章　青い芝の会　142
第八章　女性からの証言　168
第九章　「寛大なご処分を」　183
第十章　実刑判決　194
第十一章　旅路　202
あとがき　209

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

我が子、葦舟に乗せて

第一章　最良模範囚の出所

一九七七年（昭和五十二年）の暮れも押し迫まった十二月二十三日の午前九時すぎ、一ノ瀬菊代は和歌山の女子刑務所所長室で「仮釈放許可書」を所長から手渡され、

「もう二度とここに帰ってくることのないように」

との、訓辞を受けた。

そして、舎房衣の服を私服に着換え、領置品と刑務所での作業賞与金を貰い、事務所の表玄関から外に出た。

四十歳の菊代は、背が低く、痩せ細った身体に茶色のスラックス、チェックのグリーンのオーバーを身につけ、所持品を入れた買物袋をひとつ下げていた。その格好はちょうど、一年前の冬、栃木の女子刑務所に収容された時とまったく同じだった。増えたものといえば、刑務所内で買った国語辞典と歴史辞典の二つだけであった。

国鉄阪和線の和歌山駅から車で十分の所に位置するこの和歌山刑務所は、京都と和歌山を結ぶ国道二四号線沿いに建てられている。二階建ての事務所は国道に面し、古い西洋風の建物の中央部は時計塔のように聳えている。刑務所はその事務所に隠れるようにして裏手に隣接していた。

市内循環バスや輸送トラック、乗用車が頻繁に行き交う二四号線から一瞥しても、そこが刑務所であるとはすぐに見分けにくい。

事務所の表玄関前には庭と池が設けられ、庭を左右からまわりこむようにして玄関まで車が乗りつけられるようになっている。右手の面会人待合室では、背広を着た菊代の夫・与一と着物姿の実母・ハル、それに村の小学校の校長を停年退職した初老の保護司の三人が、菊代の出所を待っていた。

玄関前には「いずみ寮」の寮長松田としこも、菊代を送ろうと来ていた。「いずみ寮」は、全国の女子受刑者の中で最も模範となるべき者のみが選ばれて行くことのできる、日本でひとつしかない女子の完全な開放処遇の施設で、和歌山刑務所の管轄下に置かれている。

菊代は三日前まで、その「いずみ寮」に殺人犯として、入っていた。重いてんかんと発作の病気をもち、軽い知恵遅れを伴う次男のわが子を絞殺して、実刑二年の判決を受け、服役していたのである。

「いずみ寮」は大阪府和泉市の泉北丘陵にある近代的な工業団地「大阪婦人子供服縫製作業団地」の中に置かれ、鉄筋コンクリートの五階建独身寮六棟のうちの一棟が「いずみ寮」として使用されている。阪和線では和歌山に行く途中の和泉府中駅で下車し、そこから婦人子供服団地行のバスに乗る。

受刑者は、ここでは「寮生」と呼ばれ、朝七時四十五分に各自決められた団地工場に独りで歩いて出勤し、午後五時二十分に帰寮して、風呂をわかし、掃除、花壇の手入れ、夕食の準備などをする。夕食後は自由時間となり、午後九時半に寝床に就く。

寮には鍵や格子などは一切なく、逃走しようと思えばいつでも容易にできる。いわば「いずみ

寮」はどこの町にでもみられる工場の女子寮となんの変りもないものであった。それだけに、この「いずみ寮」に来る女子受刑者の資格は、刑務所内での生活態度、作業成績の優れた者だけに許可される。受刑者の累進処遇は行刑累進処遇令に基づき、四階級に分けられており、初犯者は誰でも四級から始まり、三級、二級、一級と上にいくに従って処遇が良くなり、優秀な受刑者ということになる。一級の受刑者を最上級者といい、「いずみ寮」の処遇はその最上級者の扱いである。

「いずみ寮」を去る日の前の晩は、寮生全員が菊代の送別会を開いてくれた。大福餅をつくり、「おめでとうございます。長い間ごくろうさんでした」などとみんなが祝辞を述べ、お得意の歌や芸を披露し、祝してくれた。松田寮長は、送別会には必ず読む坂村真民の《二度とない人生だから》という詩をこの日も読んで聞かせた。

菊代が「いずみ寮」から再び和歌山刑務所に戻ってきたのは、「釈放前教育」のためである。消費者センター職員から物価の動向について話を聞いたり、市役所や郵便局などの公共施設に行って利用制度、手続の変更の説明を受けたり、あるいは実際にスーパーマーケットに行って買物をする。釈放の前夜は、その自分で自由に買ってきた献立の材料で料理をつくり、保安課、分類課、教育課の各課長らと会食をし、刑務所での最後の夜を過ごすのだった。

和歌山刑務所の事務所を出た菊代は、〈これで刑が終った〉ことを身をもって悟り、晴れて自由の身になった歓喜と厳粛な緊張感が身体の底からこみあげてきた。

〈これからは、家族のために、鶴の恩返しで一生懸命に頑張ってゆくしかない、あの子の冥福はいままで以上に祈らなくては〉

そう菊代は自省の念を強くした。

開放施設にいたとはいえ、刑務所の門を出たいま、澄明な冷気を帯びる空気の匂いも、温和な冬の陽光を浴びている樹木の葉の色も、土の色も、格別であり、やはりここは〝別世界〟であった。

面会人待合室から出てきた夫と実母と保護司、そして松田寮長たちは、菊代と手をとり合って喜んだ。保護司は出所の際に出迎える必要はないが、「私は旅行が好きで、悪いけども一緒についてきた」と言った。タクシーを待つ間、松田寮長が、これから元の生活に戻ってゆく菊代の心中を察して、

「近所の人とのつき合いを心配しているのやけど大丈夫やな」

と言うと、菊代は、

「先生わかっているよ」

と元気よく答えた。

刑務所帰りの女を村の人たちがどのような目でみるのか、その恐れ、恥しさ、不安は、仮釈放になった嬉しさの陰で菊代の心をどんよりと曇らせてはいたが、家に残した二人の子供の傍に今日から居てやれるという歓心の方がいまは遙かに大きかった。それに、夫と実家の母が面会や手紙で何度となく、世間では何か言われるかも知れないが頑張ってやれ、そう心配するな、と勇気づけてくれてもいた（菊代が刑務所から帰ったことは、村の人びとにはすぐに知れ渡った。「一ノ瀬さんが家に戻っているらしい」「車を運転しているのを見た」「よくあそこへ帰って来れたね、普通なら遠くへ引越しちゃうけどね」「帰って来たのは相当な心臓だ」――などとしばらくは噂が飛び交ったが、菊代や家の者たちの耳には入ることはなかった）。

別れ際に松田寮長は、勝気な面のある菊代に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「一ノ瀬さん、正しすぎてもいかんのや、自分が正しいと思うと人を裁くようになるから、そこだけは気をつけてや」
と、気になっていた事を伝え、そして与一とハルに向って、
「一ノ瀬さんが『いずみ寮』に来てくれて畑ができ、野菜が自給自足できるようになって本当に助かり、私は感謝していますよ」
と言った。
松田寮長は、菊代たちの乗ったタクシーを国道にまで出て、見えなくなるまで手を振って見送った。

刑務官の松田としこが「私は感謝していますよ」とお礼の言葉をのべ、一級者の中でも最高に等しい仮釈放を許可されて出所した一ノ瀬菊代は、一九七六年（昭和五十一年）十二月二十五日、殺人の罪名で栃木刑務所に収容された。
その日は、身が縮むほどひどく寒い日だった。菊代は刑務所に向う護送車の中で、わが子の命を自らの手で奪った自分を〈どうして！　なぜ！〉と激しく鞭打ち続けていた。いくら省みても取り返しがつかないことをしたわが身の行為を責め苛むしか菊代にはなかった。
深い呵責と、受刑者となるこれからの未知の生活への畏怖とで、菊代は自失したように、当分の間は見ることのない町や村の営みを、車の窓から眺めた。
しかし、護送車がいよいよ刑務所の門を通過した時には、菊代はどんなことがあっても自分に科せられた刑は務めあげなければならない、とようやく覚悟のようなものが芽生えていた。それにこれから忍苦の日々が私の最初のあの子に対する償いにもなるのだと、自分に言い聞かせた。

菊代の実刑二年（二四か月）は、未決拘留期間百日（三か月）が算入されているため実際の刑期は一年と九か月（二一か月）であった。全国の女子刑務所は、札幌刑務所に併設されている女区、栃木刑務所、「いずみ寮」を含む和歌山刑務所、岐阜の笠松刑務所、佐賀の麓（ふもと）刑務所の五か所であり、菊代はまず五か月半を、栃木刑務所で送った。

その五か月半の間に、菊代は早くも四級から二級に進級していた。累進処遇の各級の差は、たとえば面会と手紙（一通）を出す回数が四級の場合、月に一回であるが、三級になればそれが月に二回になり、二級になれば週一回、一級は随時、としだいに緩和されてゆく。二級・一級者を合わせて上級者ともいい、上級者になると居室も良くなり、寝具も新しくなる。

作業内容も当然違った。最初、菊代は所内の第一工場に出てズック靴をミシンで縫う流れ作業を一日中行なっていたが、一か月位経った頃、「仕事振りがきちんとしているので今度は外掃夫さんになってもらいます」といわれた。

工場は第一、第二、第三に分かれ、初犯者が第一、累犯者が第二、問題の多い受刑者や養護を必要とするような受刑者が第三、となっている。この他に「経理夫」といわれる工場での作業成績の非常に良い者が抜擢されて行なう作業があり、内掃夫、洗濯夫、看護夫、炊事夫などと細かく分類され、二百三、四十人の受刑者総人員の内およそ四十人がこの仕事に従事している。外掃夫も「経理夫」の中のひとつの仕事で、所内の花壇の手入れ、畑の草抜き、塀の外に出ての庁舎、池、墓地の掃除を行なう。

だから「経理夫」の中でもとくに外掃夫の選定は保安上心配のないことが第一原則とされ、年齢が比較的若く、身体が丈夫で、肉体労働の経験がある者、という条件が加味されてゆく。

菊代の場合、再犯の恐れがないといわれる「子殺し」の犯罪者で、工場での作業成績が良く、

働き者で、農村の主婦、離婚していない点などから、外掃夫になれる条件は揃っていた。

七十人ほどの雑多な受刑者とともに働く、単調な第一工場の作業に比べると、七人程度のグループで、所外に出ることのできる外掃夫の仕事は、自由を束縛された菊代の精神的苦痛を柔らげた。

だが居室での生活は、身体に針が刺さる毎日であった。部屋は六畳の雑居だった。刑務所暮らし五度目の五十女で布団や茶碗に触っただけでブツブツ文句をいう意地のわるい窃盗犯、スリが楽しみだという逮捕歴八回の五十過ぎのスリ常習犯、四十前の大嘘つきであることないことをいいふらして菊代を困らせる窃盗犯、一か月だけ一緒だった三十歳位の髪が長くのび、染めた赤毛が残っているヤクザ風の覚醒剤の密売女——たちと一緒に菊代は寝起きした。チリシや歯磨粉の使い方が多い、寝がえりをうつな、私の物に触るなと、彼女たちは怒った。トイレに置いてある共同の履物を使っても、それは私がいつも使っているものだとか、私のものが盗まれたといいがかりをつける。トイレに唾をするとすぐ拭いてこいと文句をいわれ、あの女は常識を知らないなどと、なにかにつけていいふらされた（上級者の部屋には鍵はなく、トイレは別室であった）。

彼女たちは人の悪口ばかりを言い合い、会話にもついてゆけず、「てめえェ」という言葉が飛び出したりする。菊代は「ごめんなさい」「すいません」で彼女たちとの生活を押し通した。部屋に帰れば終始おどおどし、神経の休まる暇はなかった。彼女たちに、優しさ、労りは微塵もなかった。その、奈落の日々の中で胃を害ね、胃薬は医務課からずっともらって服んだ。泣くときはいつもトイレに駆け込んでいた。

菊代の楽しみは、夜、眠りに就き、夢の中で死んだあの子に出会うことであった。拘置所に入っている時もそうであったが、あの子の夢を見ない日はほとんどなかった。この間までは、夢に出てくるあの子の顔にはどこか暗い陰がさし、笑っている自分の顔も心の底からではなくどこと

なくつくった笑い顔で、うなされて目が覚めることがしばしばあったが、いまは不思議と楽しそうに二人で手を繋ぎどこかを歩いている夢が多かった。

累犯者との辛い共同生活の中で、しかし菊代はじっと耐えた。家には自分の帰りを待つ二人の子供がいることを考えつづけた。事件を起したあの村に再び帰ることは、死ぬほど辛く、恥しい思いであるが、それから逃げることはあの子に対しても許されることではない。犯してしまった罪の代償とあの子にしてやれなかった分とを、残った二人の子供に精根尽き果てるまでしてやることに、今後の自分の人生があると自分に言い聞かせて、所内で問題を起さぬよう、睨まれないようにと、ただひたすら歯を食いしばった。

菊代の支えは、家族との面会と家からの便りだった。栃木刑務所に入っている五か月半の間に、夫、実母、すぐ下の弟の三人が揃って、一月から四月まで、毎月のように面会に来てくれた。四月の面会の時には、夫が三万円を差入れてくれたが、あとで菊代は中学に行っている長女の千草の修学旅行の費用の足しにと送り返した。五月は田植で忙しく面会に来てくれなかった。

三十分の短い面会時間の中で、夫と母は、「身体は大丈夫か、家の事は心配するな」といい、菊代は、「私の事は心配しなくてもいい、職員の人も一緒の部屋の人もみんな良い人ですから、子供たちをよろしく頼みます」と、いつも話す内容は同じだった。しかし弟だけは面会に来てもひと言も口をきかず、黙ってうつむいたままだった。

菊代の出す手紙の多くは、料理、洗濯、勉強、朝寝坊などの注意を細かく書いて二人の子供に宛てたものだった。高校受験を控え、菊代の留守の間の炊事をやっている千草からの手紙には、おかずの作り方について判らないことや、失敗したことなどばかりが書かれていた。例えば、おでん、魚の煮つけの味つけがうまくいかない、この間は塩ぼかったとか、手にあかぎれができた

のでどうしたら治るのかなど。
高校生の長男・滋雄から五月に初めて手紙が来て、お母さんの里の分家の若奥さんが突然死に、葬式はおじさんの嫁さんがお母さんの替りに手伝ってくれたから安心してくれ、と書いてあるのを読むにつけ、みんなに迷惑をかけて申し訳ない気持で菊代は胸を痛めた。
彼女は夫あてに「無理でしょうがいま少し我慢して下さい。世間には色んなことを言っている人もいると思いますが、それに惑わされず、私が家に帰ればどんなことにでも耐えますからいまは我慢して下さい」など、かえってはげましにもとれるような手紙を書いた。しかし夫からの手紙は一通も手にすることはなかった。
初夏に入った六月六日、菊代は突然、移送の告知を受けた。
「あなたは生活態度がいいので、『いずみ寮』生として和歌山の刑務所に行くことになりました」
出発は明日の朝早くだという。菊代は唖然とした。そこがどんな所か詳しい説明を聞いていない。それに、家から遠く離れることが彼女を不安にした。
「和歌山は家から遠く家族も面会に来てくれないだろうから、ここに置いてもらうことはできないでしょうか」
という菊代に、刑務官は、あなたと家族のためを思って一日も早く帰るように選んだのですよ、だからむしろ喜ぶべきことなのだ、という。それでもしばらくの間、菊代は不安で返事ができなかった。しかし、一日でも早く家に帰ることができるならと思い直し、「ありがとうございます」と言った。その夜、菊代は複雑な気持で泣き明かした。
累進処遇の進級には、受刑者の刑期に応じた一定の期間が各段階に設けられており、また所内で行なう作業にそれぞれの受刑者に「責任点数」が課せられ、それらを満たさなくてはならない

のが通常とされている。菊代の場合、五か月半で二級までの進級はかなり早いスピードであった。その決定は彼女の刑期や「責任点数」以上の評価と思われた。そのように進級してゆくことを「特別進級」といい、一か月間に大体ひとつの女子刑務所で普通に進級する受刑者は六十人であるが、「特別進級」組は月に二、三人程度と少ない。菊代は優秀な受刑者ということになる。

雨の降る翌日の朝七時頃、所長への挨拶を終え、二人の護送職員と、もう一人の受刑者と共に菊代は東北本線小山駅から上野、東海道新幹線で東京駅から新大阪、国鉄天王寺駅から阪和線で和歌山駅への、長い旅についた。新幹線の中で、外の景色を観ながら駅弁当を食べさせてもらった。刑務所では麦と白米が四分六分のご飯だったから、菊代は勿体ないと、一口一口を噛みしめて食べた。和歌山刑務所にはその日の夕方に着いた。

七月八日までの約一か月間、菊代は和歌山刑務所の、洋式トイレと手洗い、鏡、本棚が付いている小奇麗な三畳独房に寝起きし、日中は工場でワンピースのステッチかけをしながら、「いずみ寮」へ出て行く日を待った。関東と関西の気質の違いのせいなのか、ここの受刑者たちの物腰は穏やかで、栃木刑務所のように囚人同士の人間関係に喘ぎ、中傷、罵倒を浴びせられ、泣かされるようなこともなかった。

汗ばむ快晴の七月九日の午後、菊代は和歌山刑務所で、グリーンのスカートと白いブラウスの夏服、サンダルを借り、迎えにきた松田寮長に連れられて、「いずみ寮」に入寮した。菊代は念願の第一級者となった。

「いずみ寮」までの途中、列車の中で松田寮長は、冷いオレンジジュースとくるみを買ってやり、足を伸ばしなさい、外の景色を観なさいと、固くなっている菊代の心をほぐしてやった。松田寮長の温かい気づかいが菊代には身に滲みた。車窓から、菊代の家の庭にあるのと同じ凌霄花(のうぜんかずら)や紫(あ)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.